

欲を促進さす方策ではない。

大学での勉学は、自らの学習、研究であって、ただ単に教授から知識を授けられることによって行なわれるのみでないといわれるとき、大学図書館の大学社会に対しての役割機能のもつ意義は大きい。四回生となつて、卒業論文の構想を練っている毎日であるが、大学図書館の存在意義を意識的に自覚することは学生生活において無意味なことではない。

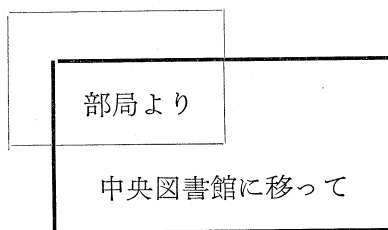
(文学部 4 回生)

附属図書館には、レファレンス・サービスを本来の使命とする参考掛があり、参考図書室のカウンターで、利用者の質問や相談に応じています。しかし現在の段階では掛員が2名で、雑誌や資料の整理、交換などの業務に追われ、積極的な活動ができかねる事情にあります。利用者の要求に応じて、でき得る限りのサービスをしておりますので、ご利用下さい。

参考資料は、主として参考図書室に配架されています。しかし語学の辞書、法経の参考書、年鑑、白書等は、開架図書室のカウンター横にも置いています。なお、参考図書室は人員の関係午後5時に閉室しますが、それまでに閲覧手続きをすれば、開架室の図書と同様8時まで利用できます。

図書館の利用方法やその他疑問があれば、遠慮なく掛員に尋ねて下さい。参考図書室の入口に投書箱も設けていますから、希望や意見をお聞かせ下さい。

——編集子より——



L.M

春の嵐にも似た人事異動の波にのせられて、去る4月部局図書室から図書館に移って来たのであるが、ここも圧倒的に女子職

員の多い職場である。

まず毎朝出勤後直ちに一斉に拭き掃除が始まるが、女子職員にとって、お茶くみや、お掃除等、問題になって敬遠されがちなこの時節に、この人たちは広い部屋の書架、カード箱、机等を、短時間に実にむつまじく、いそいそと片づけられるが、これはとてもさわやかな光景である。これだけ統一のとれた職場であるから、膨大な図書の整理業務においても、人手不足というものの、要領よく、非常に敏速に、且つ悠々とはいかどらせている。勿論これは優秀なスタッフがそろっているためでもあるだろうけれど、ただ一つ残念なことは、ここは研究室から疎遠になっていて、研究者に接する機会も少なく、学界の情報も入らず、その結果ここで働く人たちは大学図書館の利用者である教官や学生にサービスする重大な使命をともすれば、忘れてゆくようなことになるのではなからうかと思う。

現在のところこの整理業務は部局の図書の受入登録と目録作成に関するだけで一応終わっているが、かつて部局図書室で私が経験したように、研究者の要望に応じて研究資料を収集し、特に入手不可能な西洋の稀覯書の場合は、ヨーロッパの図書館の蔵書目録を調べてマイクロフィルムコピーで取りよせ、さらにその目録の作成や分類はいうまでもなく、教官の申出によって主題目録をも作って研究室に備える等、研究者へ奉仕できる自分の立場に大学図書館職員としてのささやかなよろこびを持っていたのだが、ここではそれほど深く細かいサービスをする必要もなく、またそのような時間的余裕もないようである。その点私自身にとっては、いささか淋しく物足りない気がする。ではこの中央図書館において、どういうことに仕事の上のよろこびをみつけてゆくか、それは今後私の探究せねばならぬ課題である。

(附属図書館員)